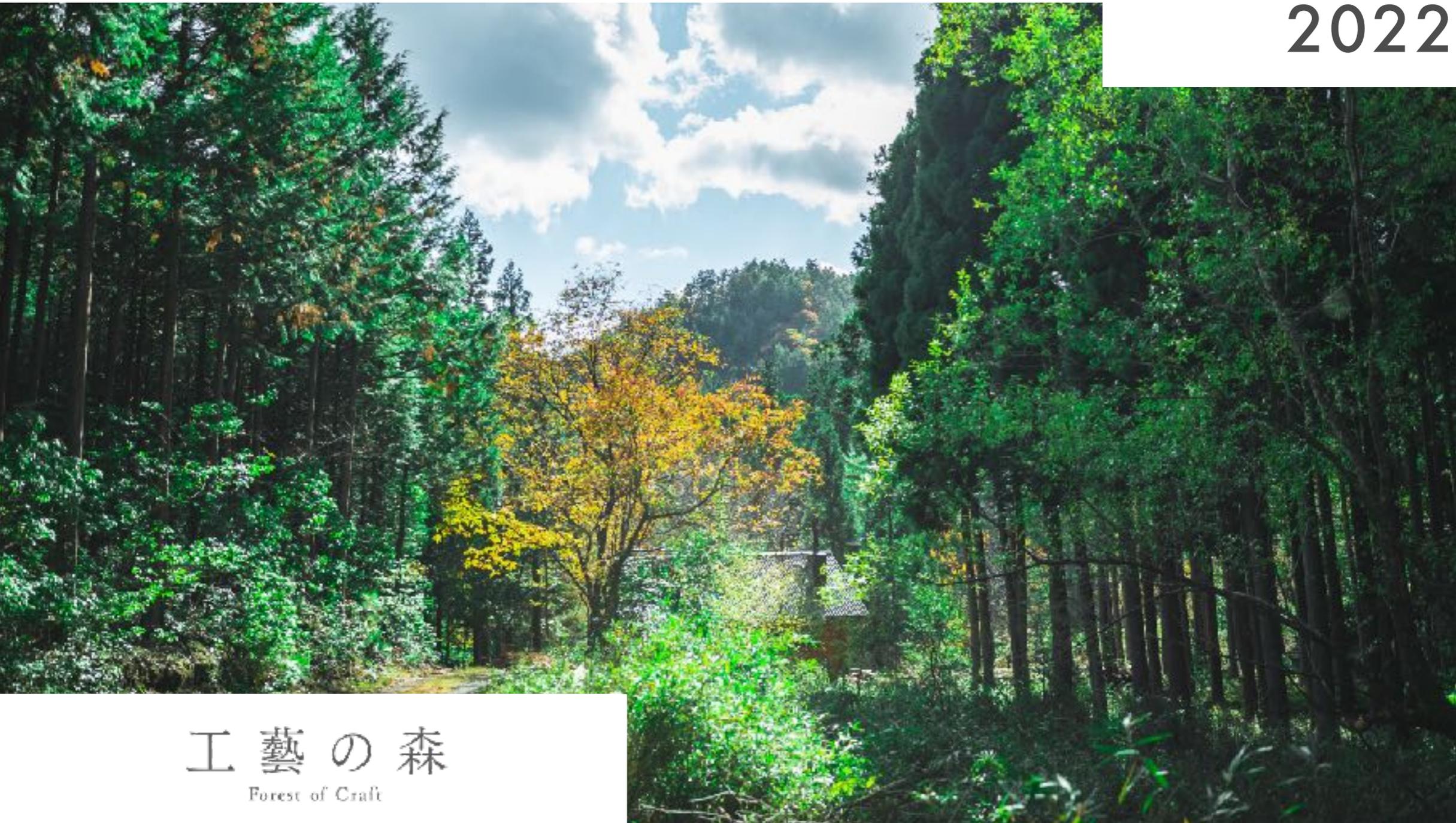


2022



工 藝 の 森  
Forest of Craft

## 森の活動報告 Annual Report

ご寄付をいただいた皆さまへ、感謝を込めて。

# 工 藝 の 森

Forest of Craft  
のモデルフォレスト

京都市有『合併記念の森』内の2.0haの敷地を、「工藝の森」の活動拠点として、管理・運営しています。

268ha（東京ドーム57個分）の面積に広がる広大な森。80年代にゴルフ場開発が頓挫して放置された敷地が、その後、市民の森となりました。開発のためにひとたびは広大な面積が伐採され、その後放置されたため、林業のためのスギ・ヒノキなどの単相林が広がる京北において稀有な、多様な樹種を育む自然再生林となっています。

京都市がこの合併記念の森の活用に関し、「伝統的な技術を継承するための森づくりの場となること」、「森の生物多様性を育む場となること」、「市民に開かれた森となること」、という指針を掲げていたことに共感し、この森に「工藝の森」をつくることにしました。2022年12月現在、2ヘクタールの土地の開拓・植栽・育樹・整備の一切を、地元の森のスペシャリストとともに、自身の責任において行なっています。

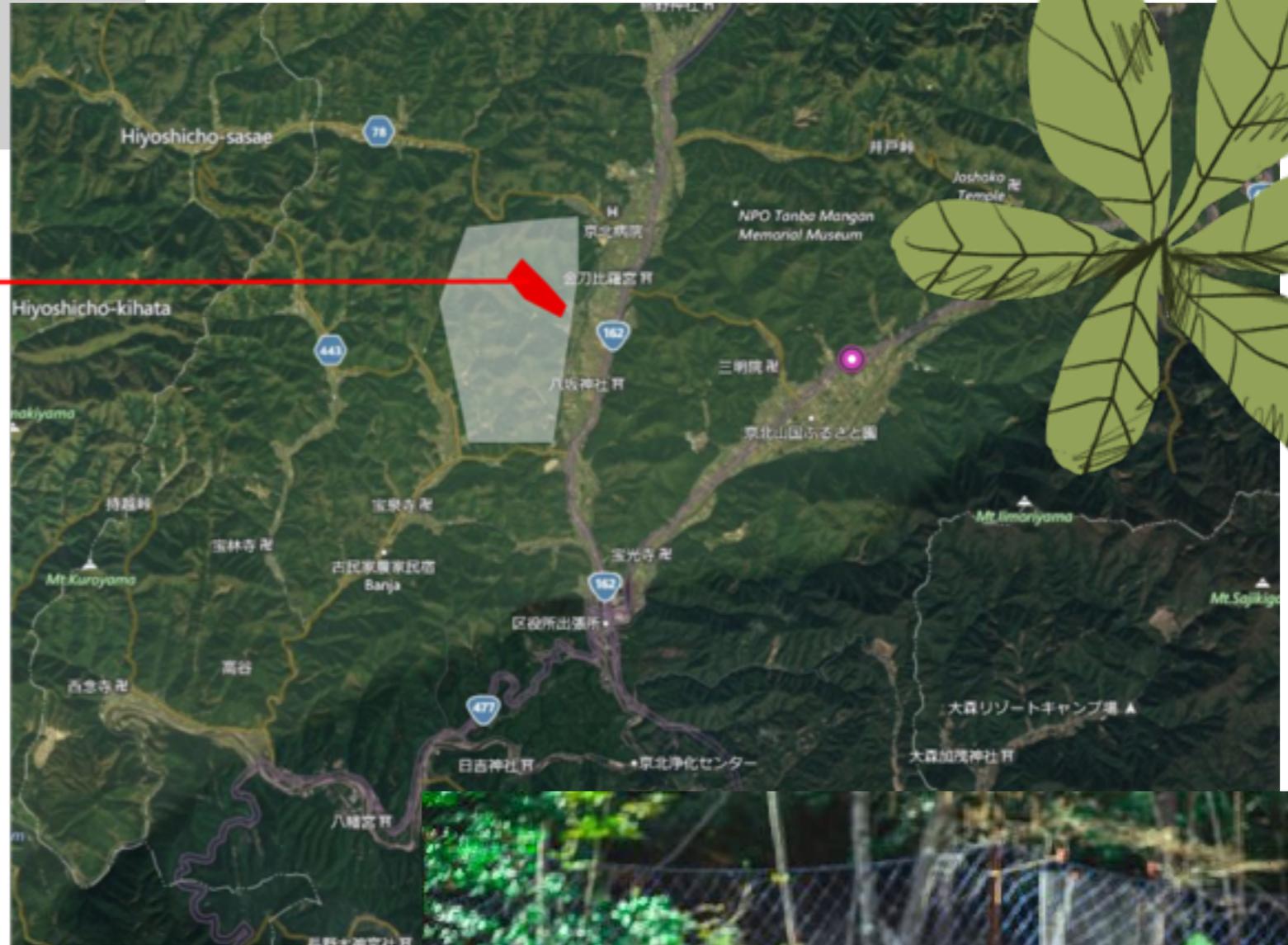
植樹・育樹に取り組むコミュニティを形成し、2019年4月より5回の獣害策設置・植樹を開催してきました。

漆 140本

桐 親木3本から約15本の萌芽更新

桑 漆と共生植樹

2022年11月現在



# わたしと育つ、工藝の森



## 立命館小学校4年生の課外授業

日時：2021年11月

実施内容：

小学生120名に工藝の森をフィールドとして、立命館小学校3年生120名を工藝の森に迎えて、3日にわたるスペシャル授業を行いました。まず1日目は、京都市街地にある彼らの小学校で、「漆って何？」をテーマに、代表の堤卓也が2時間お話ししました。二日目は、工藝の森近くの研修施設「あうる京北」にて、モノづくり体験。木工指物の職人さんから、伝統的な指物では、自然素材のみが使われ、木を磨くのに、最後の仕上げのワックスにも、植物を使っていたことを学びました。絹糸をつかってらっしゃる職人さんからは、お蚕がたべる桑が、私たちの暮らしにあらゆる側面で役に立ってきたことを学びました。その後には、実際に木片を、トクサという植物で磨き、イボタロウという、イボタの木からできる自然のワックスでコーティングしてツルツルにする作業をしたり、蚕繭から糸を取り出す作業を体験しました。翌日、子どもたちは森にて1日課外活動。午前中は、『工藝の森ナビゲーター』とともに森を巡って、森の植物ひとつひとつが、人の生活でどのように使われてきたかを学びます。ピクニックでお弁当を食べたら、次は間伐材を整理する作業をお手伝い。自分の身体よりも大きな枝を取り回して整理し、森をどんどん綺麗にしていきます。そして最後に、みんなで力を合わせて、漆の植樹。これから15年ほどかけて大きくなる漆の苗に、健やかに育つようおまじないをかけて終了。120人の子どもたちで、40本の苗を植えました。



数名ずつチームを組んで、一生懸命木を植えるための穴を掘りました。山の土は畑の土と違って、堅くて石もごろごろあって、なかなか大変でしたが、みんな頑張ってくれました。



「大きくなあれ！」と言って植えています。この子たちが成人して少したったころ、やっと漆掻きができるようになる小さな苗。この120人のうち1名でも、漆の器を生活のお供にしてくれる子が誕生しますように。



弊社側臨時スタッフ10名、立命館小学校の先生10名、合計20名の大人の目がありましたが、それでも安全面に関しては非常に神経を使うイベントとなりました。オペレーション上の課題も、一つずつ解決していきたいです。



工藝の森のフィールド全体を使ったフィールドワーク。この日に合わせて10名のスタッフと実習を重ねて学んだ、この土地の植生と、それぞれの植物と人の暮らしとの関係性を伝えることができました。



何か発見したら、身体でじっくり観察することを大事にしたい。一方で「私たちだけのものじゃないから、取るのはひとつだけね」と教えます。



子どもたちなりのフィールドノート。葉っぱを貼り付けたり、絵を描いたり。触ったらトゲトゲしていたり、匂ってみたらいい匂いがしたり、身体で学ぶことを大切に。



間伐された小径木を、束ねて整理する作業。この作業によって、森の床に光が届きやすくなり、土の中に眠る植物の種子が芽吹きやすくなる。新世代の森を育む、新世代の子たち。

# 人と森の間の、グラデーションを知る

## 『工藝の森ナビゲーター』養成講座

日時：2021年10月～11月

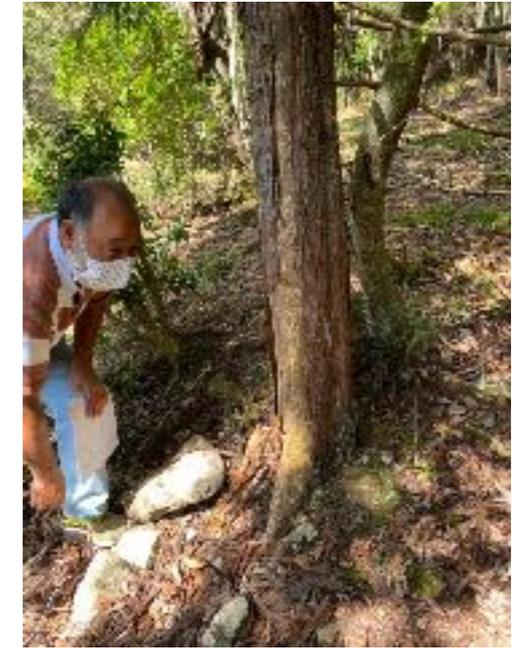
### 実施内容：

前述の小学生120名を森にガイドするため、10名の「工藝の森ナビゲーター」を養成する研修を3回に渡り行いました。10名のナビゲーターは、「工藝の森の森の先生である塔下守さんに付いて森を巡り、たくさんの木々の名前だけでなく、それらがどのような場所を好んで生きているのか、どのような生存戦略があるか、といった植物生態学的なことだけではなく、大地の変動の軌跡といった地質学的なことや、それらの植物が人の暮らしにどのように役立ってきたかという民俗学的なことも学んでいきました。また、塔下さんと森を巡っていると、話は植物のことだけにとどまらず、ここに古墳があった、ここは昔田んぼだった、などという情報にまで及び、現在わたしたちが「森」、つまり、人の暮らしとは一線を画すような場所として捉えているこの土地が、かつては人の暮らしともっと緩やかに繋がっていたことに驚きを感じました。

実施中は一人一冊のフィールドノートをつけ、それらの植物が生えていた場所を、GoogleMapにマッピングし、研修の終わりに持ち寄り、そこから取捨選択した情報で、「工藝の森マップ」を作成しました。以来、この工藝の森マップが、訪れる人の手頃なナビゲーションとなっています。



「工藝の森」ナビゲーター候補たちが、3回にわたり実習を重ねて学びました。この土地の植生と、それぞれの植物と人の暮らしとの関係性について掘り下げていく一方で、ひとつひとつの木々の特徴を、できるだけ詳しく調査しました。



お茶やエッセンシャルウォーターになる、極上の香りを持つ「クロモジ」（左）最近林業の問題になっている「カシ」のことを説明して下さった。（右）

# 楽しい学びを伝えるための、ツールづくり

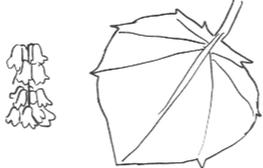
## 『工藝の森』マップの作成

日時：2021年10月～11月

### 実施内容：

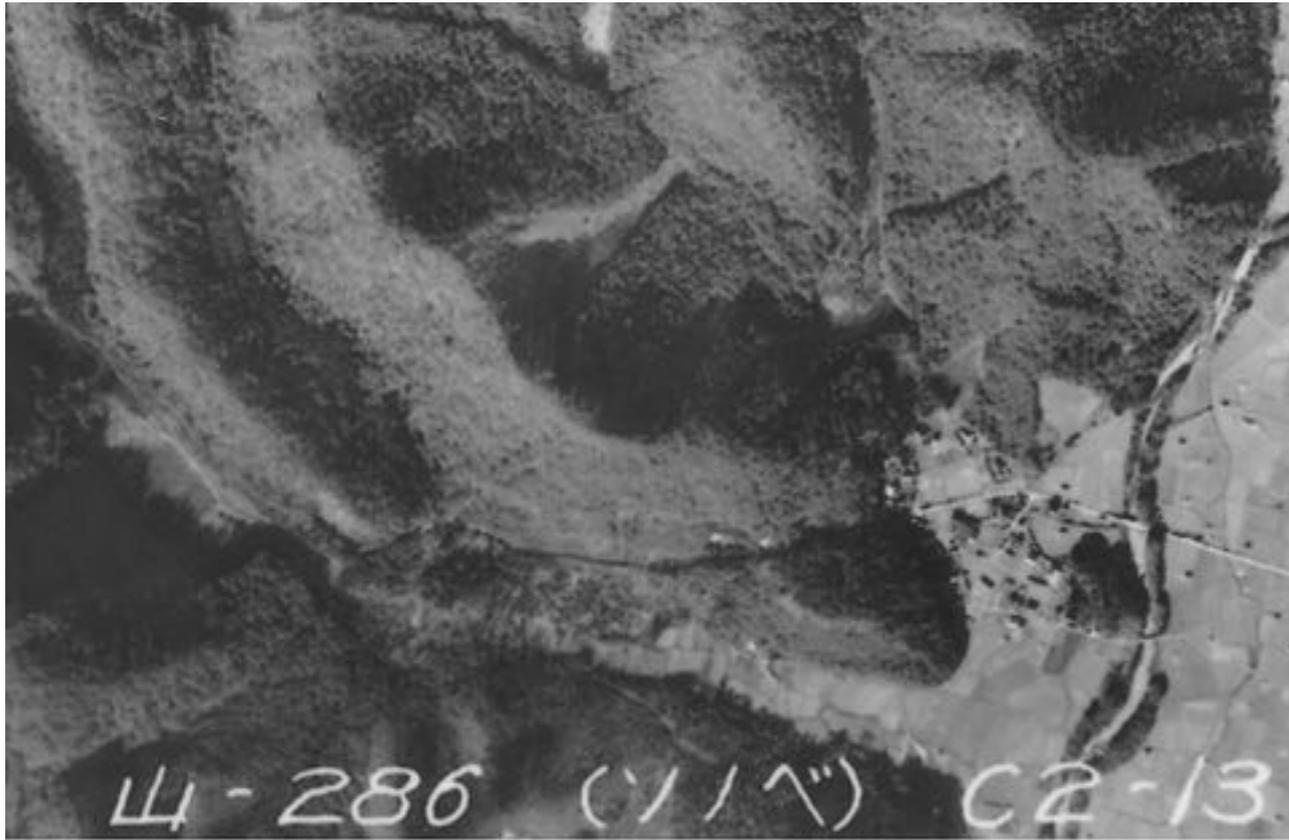
ナビゲーターたちと重ねたフィールドワークをベースとして、私たちの管理する森の様々な木々を主役に、工藝の森のマップを作りました。

フィールドワークで洗い出した森の宝たちを、「人の暮らしとの重なりを感じられる森の登場人物たち」という観点で情報量を絞り、歩いて探ることが楽しくなるよう、かわいいイラストでマッピングしました。子どもたちとのフィールドワークではA3に出力し、ナビゲーターから学んだことや感じたことを書き込めるようにする一方で、通常バージョンはA4で印刷し、以降訪れる人の森の散策のお供になっています。

 <p><b>ウルシ(漆)の植栽について</b></p> <p>日本の伝統工芸で使われる漆を使う人は、年々減ってきています。漆は、木の樹液なので、漆を採るためには、木を傷て育てなければなりません。ここでは、その木を植えています。これまでにみんなで140本近くを植えました。漆が取れるようになるまでに成長するには、10年～15年くらいかかって、一本の木から、200ml、牛乳瓶半分くらいしか樹液をとることができません。その間、十分な太陽や、栄養分が必要です。そして、草刈りをしたり、虫や動物から木を守ったりする作業のために、たくさん人の手が必要です。</p>	<p><b>獣害について</b></p> <p>今、京北のように山に囲まれた地域では、もともと山奥にいた鹿たちが私たちの暮らしのすぐ近くまで降りてきて、大事な畑や、森の中の小さな苗を食べてしまうという被害が、とても深刻になっています。そのため、ここに漆の苗を植えるためにも、柵やネットが必要で、これを設置するためにも、みんなで力を合わせて働きます。かわいいけど、けっこう苦労しています。森を気をつけて見ると、今は姿が見えない動物の息遣いが感じられます。</p>  <p><b>こふん(古墳)について</b></p> <p>昔々、この辺りには、「古墳」と呼ばれる、村のリーダーのための墓がいくつも作られました。今もその跡が見られます。このことは、どんなことを示しているのでしょうか？今は木々が茂って動物がいるけれど人がいない。そんな山の中の森に思えるこの谷には、昔、村があったのです。人が集って暮らし、家を建て、小さな川に沿って田んぼで稲を作っていました。想像できますか？</p>
 <p><b>キリ(桐)ノキについて</b></p> <p>その昔、家族に女の子が生まれると、近く桐の葉を採って、その子がお嫁に行くときに、その木でタンスを作って、嫁入りの時にもたせる、という風習がありました。桐は軽くて、精密に加工しやすい木です。虫が壊って腐り付かないし、湿度を調節したり、吸収して保ってくれるので、着物を保管する衣装ダンスとしてびっぴりの木なのです。</p> <p>工藝の森の仲間がつくるサーフボードも、桐が使われています。桐の材を使ってサーフボードが作られ、その上に漆が塗られているのです。桐の木も、私たちの暮らしにとって大切な木です。だから、私たちはここで、桐の木も、育てています。桐は、漆が取れるようになるまでに漆の木が必要する期間と同じくらい、10年～15年かけて育ちます。ひとまわり大きな葉っぱをつけていますが、5月には黄色い可愛い花も咲きます。</p>	 <p><b>ホオ(朴)ノキについて</b></p> <p>もう一つ、大きな葉っぱをつけるのは、ホオノキです。朴の葉っぱは殺菌作用があるので、おにぎりを包んだり、お味噌とお肉を乗っけて炭火で焼いて食べたりするのに使われました。ホオノキは、キノコと同じように軽いので、湯や茶器を作るのに使われました。そして、刃物が当たった時にやわらかくて刃物を曲めないで、まな板や、刀を収める鞘さやにも使われました。</p>
 <p><b>サンショウ(山椒)について</b></p> <p>日本の情緒とも言われるサンショウ。「山椒は小粒でもピリと辛い」と言う言葉がありますが、これは、からだは小さいけれど、才能があったり、知識があったりして、力を発揮する人のことを表します。初夏につける実は、お漬物といたってご飯にのけていただくと、大人にはとてもおいしいです。子どもには、ちょっと刺激が強いかも？</p> <p>サンショウの木は、「薬を(する)」ための道具である「すりこぎ」に使われてきました。すり鉢と、すりこぎで、ゴマなどをすりつぶします。解毒作用があるため、ゴマなどと一緒にはんだけすりおられるサンショウの木の成分が、冷蔵庫の無い時代には食あたりを防くこととされていたそうです。また、自然の凹凸があってしっかりとにぎりやすいという特徴も、人が山椒をすりこぎに使うようになった理由かもしれません。</p>	 <p><b>クロモジについて</b></p> <p>クロモジは、葉っぱや枝がとてもいい香りの樹木で、4月ごろ、黄緑色の可愛い花が咲きます。昔から、上品な香枝のようにして使われてきましたが、茶道では今も、お菓子にいたるに使われています。葉っぱはとてもいい香りのお茶になったり小枝や葉から香油を採取して、香水や化粧品、石鹸の香料ともなります。</p>



# その土地の人と自然との関わりの歴史を紐解く



合併記念の森1962



合併記念の森2022

## 地域の景観の歴史から紐解く、「植生と人の経済活動の歴史」調査

日時：2022年10月

実施内容：

古地図や古い航空写真を使って、地形、植生、水や流れの変化を確認したり、重機で掘られた深さ2メートルの穴の断面から、積み重なる土の歴史の変遷を見たりすることで、自然と人が相互にどのように影響してきたかに思考を巡らす調査を、木こりさん、景観生態学者、人類学者、京都工芸繊維大学デザイン学生、大阪大学人類学生とともに行いました。

こうした調査を通して、人が自然資源を使用することで自然景観を改変することの重大さと、それでもそのようにして生きるしかない人類が、自然の新陳代謝に手助けをするように、適度に自然に関わっていくことの難しさをあらためて認識し、容易に答えが出るわけではない課題に対し、自分達の果たすことができるかもしれない役割について、小さな思考の種をまきました。



# 手をかければ、森は応えてくれる

## 『工藝の森』植栽地の拡大

工藝の森が森の活動を行っているのは、京都市有の「合併記念の森」。この森が「伝統的な技術を継承するための森づくりの場となること」、「森の生物多様性を育む場となること」、「市民に開かれた森となること」を目指すという、京都市が合併記念の森の活用に関して掲げる指針に共感し、この森に「工藝の森」をつくることにした私たち。2ヘクタールの土地の開拓・植栽・育樹・整備の一切を、自分達の責任において行ってきました。もちろん、非営利の活動ですので、助成金や寄付金、そして多くのコミュニティの人々の力に助けられています。森づくりを始めた2019年春から3年弱に渡り、3回の植栽地拡大を行いました。その度に、植栽地に光を当てる、そして植栽地までの人の導線を助ける目的で、作業道もつくります。それによって、わたしたちの森には風が流れ、光の当たり方が変わることによって植生が変わり、鬱蒼とした森だったこの谷筋は、少しずつその形を変えてきています。



伐採整地前。弊社協定地で残された、比較的平坦で水捌けの良い土地はここだけを残すのみとなりました。来年度は、協定地を拡大するか、私有地に広げるか、選択が迫られます。もともとは四方八方が鬱蒼と生い茂っていましたが、協定地全体に風を通したいこともあり、この土地を伐採して切り拓き、工藝素材植物を植栽するための圃場とすることとしました。



植栽地への作業道を作りながら周囲の森を拓いていきます。伐採を終えた作業員の方が獣害柵を設置するための、柵打ちを始めます。鹿の被害が多い、この地域の近年では、獣害柵なしでは植物の植栽は難しい現状です。木の苗のコストに比べ、一桁大きな金額が、わたしたちが行うような植栽活動にはのしかかってきます。この後この土地の土が人の手では固すぎるため、植栽のためにマーキングしたスポットをユンボで掘削してもらいました。畑に野菜を植えるのとは違い、ここの環境はあらゆる側面において、ワイルドです。

# 次世代の森をはぐくむための実験



昨年、この自生の桐に日光を当てて、育成を助長することと、こぼれた種から発芽することを期待して、自生桐の周囲を伐採、整地しました。それが功を奏して、春に、整地のために入った重機に傷付けられた根から25本ほどの芽が出ました。



## 桐の次世代育成への挑戦

工芸の森では、漆と桑の苗を植えています。漆は15年後にその樹液を採取すると、漆塗りに使われる塗料「漆」をつくるのが可能です。桑は、蚕の餌となり、養蚕家のニーズに応えます。漆も絹も、日本の伝統工芸の主要な材料でしたが、戦後いくつかのブームは多少あったものの、全体的に衰退が続いています。一方で桐も、日本の木の伝統工芸にはなくてはならない素材です。私たちはモノづくりの材としての桐を育てたいと、自生の桐に目をつけました。自然のままに育ってきたため、細長く、木工に適した育ち方をしていません。しかしこのすでにある桐の木を、材としてもっと太くすることと、その種子が地に落ちた時に自然の芽吹きを助けることを目的に、自生桐の周りを重機で整地する一方で、その種を採取し育苗に挑戦しました。育苗は難しく、ほとんどが定植するほどまで大きく育つことなく枯れてしまいましたが、驚くべきことが起こりました。なんと、重機で自生する桐の周りを綺麗に整地する作業をしたことで、桐の根が傷つき、冬を超えて春に、そこから一斉に芽が吹いてきたのです。獣害の多いこの地域ですから、すぐに獣害柵を設置し、そのまま生育を見守っています。漆と桑の植栽地に加えて、桐の生育を見守っているこの圃場も、草刈り、病気の見守りなど、わたしたちが日々のケアを必要とする場所となりました。

## 実生からの発芽と生育

50粒くらいの種から、順調にそだっているのは5株のみ。実生苗の育成は打率が低いそうですが、多様な遺伝子の苗を育てるためには必要であるため、地道な継続が求められます。

# 森からはじまり、森で完結するモノづくり



## グリーンウッドワークのワークショップ

日時：2021年11月15日～20日にスツールづくり、他スプーンづくりを4回実施

場所：工藝の森@京都市合併記念の森（京都市京北）

実施内容：

乾燥も製剤もされていない、生木を使ったモノづくりを、グリーンウッドワークといいます。漆の植栽のために伐り出されたクリの木を使用して、森の中だけで、電動工具を一切使わず原始的な道具で、家具やスプーンなどを作ることができるこの木工技術は、木工芸の原点で、モノづくりに馴染みのあるひとでも鮮烈な体験をもたらすことができるようです。グリーンウッドワークは、電動工具に頼らない、つまりエネルギーインフラに頼らない暮らしの底力をつける、大切なスキルだと私たちは考えています。同時に、実際に森から資源を伐り出そうとすると、どこでもできるわけでもなく、権利関係や所有権に阻まれます。そのことによって私たちは、こんなにもみんなが必要とする森の自治について、考えざるを得なくなります。一方で、つい先日まで生えていたフレッシュなクリの木を割ったり削ったりすることを通して、生命と繋がっているような生々しさも感じ、しまいには思考をストップして作業に没頭するのです。



クリは繊維が真っ直ぐであるため加工しやすく、グリーンウッドワークに向いています。匂いも少なく、水に強いので、食器にも最適です。

繊維や水の含み方、吸い上げかた、そして乾燥の工程など、木の特性とそれに対する道具の使い方を体感していきました。

電動工具を一歳使わず、森だけで完結するモノづくり。スツール作りは3日間の大かがりなWSでしたが、満足度は非常に高いものがありました。

## 結びのことば

日本にコロナの恐怖が押し寄せた2020年春、最初の緊急事態宣言の中、私たちの森づくりの活動は、静かに始まりました。突然課された生活や活動の制限によって社会に満ちていく閉塞感からの脱出を願って、市街地からも、私たちの森に足を運んでくださる方々に恵まれた年でした。2021年に入り、コロナはもはや当たり前前にそこにあるものとなり、工藝の森のある山間地域・京北でも、罹患する方が多くなってきました。2022年に入ると、ようやくイベントや集団活動がしやすくなってきましたが、今度は戦争や長引くコロナの影響が、経済や政治など、社会の隅々まで窺えるようになってきました。

その間、森はいつでも、安心感を与える場所でありつづけています。育てている木々のために周囲の森を間伐したり水脈を整備するなど、人が丁寧に手をかけてあげると、とたんに風が動き水の流れが変わり、植生も変わっていくなど、確かな手応えを返してくれることに、やりがいを感じてきました。

単に収穫することだけを目的としていない、学びのフィールドとしての工藝の森では、人々と森の木々がどんな関係性を作ってきたのかについての知恵を、多くの方々に共有するプロセスが進んでいます。その活動を通して、私たち自身の「森を観る解像度」も格段と上がってきたように思います。

この数年間を経て、「私たちの文化を支えているのは『自然』であり、そのような文化的なモノづくりは、森づくりから始まっている」という工藝の森のメッセージは、より多くの人に響くようになってきたように感じています。それは私たちの地道で気の長い活動の成果、と言いたいところですが、実際は、この惑星が限度に近づくなかで起こっている社会の様々な警鐘的な現象によって、居てもたってもいられない人たちがこれほどまで増えてきている、ということなのでしょう。

このような「地球の曲がり角」にて、工藝の森の活動に期待する皆さまに恵まれ、私たちの森が育まれていることに、何より希望をいただき、感謝の念を感じずにはられません。私たち自身が学びを深め、この森が多くの人々の学びを促すフィールドとなるよう、そしてそのような森が少しでもひろがっていくよう、今後も引き続き努力してまいります。これからも、お力添えをどうぞよろしくお願いいたします。

2022.12.30

『工藝の森』主宰  
一般社団法人パースペクティブ  
代表理事 堤卓也・高室幸子



工藝の森  
Forest of Craft